

タイトル：2021 年度 教育セミナー（第 17 回）

日時：2021 年 9 月 16 日（木）～19 日（日）

オンライン開催

「研究と時代性：エジプト人女性運動家フダー・シャアラウィーへの視線の変化」

後藤絵美（東京外国語大学 AA 研）

研究対象となる人や物、出来事を分類したり、評価したりするという作業は、研究を進める上でしばしば必要になる。そしてそもそも、研究対象を選ぶ段階にも、先行研究で示された分類や評価が出発点となる場合が多い。20 年前、博士課程に入ったばかりの私が、フダー・シャアラウィー（1879-1947）を研究対象に選ばなかったのもまた、先行研究の影響による判断であった。

フダー・シャアラウィーはアラブ・イスラーム地域の女性解放運動の先駆者として広く知られる人物である。彼女の回想録がアラビア語と英語で刊行されたのは、1980 年代のことであった。後者の *Harem Years*（Margot Badran による翻訳と解説、初版 1987）は、ハレムの内側で育ち、やがてそこから脱出し、女性運動の先頭に立ったフェミニストの自伝として、多くの読者を得てきた。同書を読み、また同時期の女性史やジェンダー史に関する欧米語の研究（例えば Leila Ahmed, *Women and Gender in Islam*, 1992 / ライラ・アハメド『イスラームにおける女性とジェンダー』2000 年など）から影響を受けた私は、その中で示されたフダーに対する理解をそのまま採り入れた。それはすなわち、上流階層出身のフダーは、ヨーロッパ的な思想文化からの影響を受けた「西洋的フェミニスト」であり、現地の文脈から外れた「アウトサイダー」だったという理解であった。エジプトやアラブ・イスラームの地域研究を目指していた私にとって、フダーは魅力的な研究対象ではないと思われた。

ところが最近、再びフダーに関心を抱くようになった。きっかけは、やはり英語とアラビア語による、二つの新しい伝記が刊行されたことである。2012 年、フダーの孫にあたる Sania Sharawi Lanfranchi が英語による祖母の評伝 *Casting off the Veil* を出版した。そして 2013 年、アラビア語による回想録の新版 *Mudhakkirāt Hudā Sha'rāwī* が刊行された。後者に序文を寄せたアラブ文学研究者のフダー・サッダは、次のように述べていた。「文学にせよ、歴史書にせよ、ある作品を読む場合、われわれはまったくの空白〔中立的な見方〕の中にいるのではなく、特定の歴史的・文化的な文脈の中でそれを行い、史実やナラティブに対する理解もその文脈に縛られる。」すなわち、われわれは、(客観的に分類したり、評価したりしている

と思い込みがちだが) 常に特定の文脈からの影響を受けながら物事を理解している。よって、フダーの回想録も、異なる文脈の上で改めて(何度でも)読む価値があるというのである。

この言葉に背中を押されるように回想録を読んだ私の目の前には、「西洋的フェミニスト」でも「アウトサイダー」でもないフダーの姿が見えてきた。それは、当時のエジプトに固有のイスラームの言説の中で、男女のあいだの線引きをすることなく、かつ女性の主体性を求め、女性にとってよりよい状況とは何かを模索するフェミニストとしてのフダーであった。

本セミナーでは、近代エジプトの女性史やジェンダー史の分野におけるフダー・シャアラウィーへの視線の変化を、私個人の中での変化と合わせながらお話しした。研究対象に対する分類や評価のあり方が流動的であること、研究者はその点を意識しつつ柔軟に研究を進める必要があるというメッセージが、受講生の皆さんに伝わっていればと願っている。